

受難の主日（枝の主日）

ルカ 19・28－40

ルカ 23・1－49

2019.4.13

高円寺教会 18：30 ミサ

神言修道会 ネルソン・アブライ・バルバロナ神父

ある夜、一人の男が夢を見ました。自分が海岸でイエスと一緒に散歩したという夢でした。そして、散歩している途中に、空を横切って彼の人生からの場面が示されました。一つの場面ごとに、彼は砂の上に二組の足跡を見つけました。一つは彼の足跡、もう一つは神様の足跡でした。そして、彼の人生の最後の場面が彼の前に示されたとき、彼が振り向いて砂の足跡を見ると、彼は自分の人生の道にそって何度も一組の足跡だけが残っていることに気づきました。彼は、また、それが彼の人生の中で最も悲しいとき、あるいは辛いときであったことにも気づきました。このことは、彼を非常に悩ませ、それについて神様に尋ねました。「主よ、わたしがあなたに従うことを決心したあと、あなたはわたしと一緒に歩いて行くと言われました。しかし、わたしが人生の中で非常に混乱していたとき、足跡は一組しかないことに気づきました。そのときわたしがあなたを最も必要としたときだったのに、あなたが何故わたしを離れられたのか理解できません」。主はお答えになった。「わたしの子、最愛の子、わたしはあなたを愛しています。わたしは決してあなたを離れません。あなたの試練と苦しみのときに足跡がひと組しか見えなかったとき、わたしはあなたを運んでいました」。

本日、皆さん、エルサレムに勝ち誇って入場された主イエス・キリストの受難と聖週間が始まります。人々は皆、神に対して大声で歌ったり、賛美したり、枝を道に敷いたりして神の名を褒め称えましたが、残念なことに、同じ大路の人々が「十字架につけろ」と叫んでイエスを裁くかもしれません。先程わたしたちはイエスの入城を記念したのち、ユダヤ人たちと同じ様に「イエスを十字架につけろ」と叫んだら、神の前で恥ずかしくありませんか？「わたしは、わたしの罪と不信仰のためにイエスを十字架につけました。それにもかかわらず、イエスはわたしの救いのために、わたしの代わりに御自分のいのちを捧げられました。今、神様の前に相応しくないわたしがいます。わたしのためにいのちを捧げてくださって、本当に感謝いたします」と祈っているでしょうか。

ところで、皆さんはこの枝の主日の持つ伝統的な意味をご存知でしょうか。どうして人々は枝を使いますか？ 昔、枝は勝利と善の象徴でした。それで、イエスがエルサレムへ入城されたとき、人々は皆枝を手に持ったり道に敷いたりしました。しかし、そのときの人々の歓迎はイエスを世の罪を除くメシアとしてではなく、政治指導者として歓迎するためでした。そして、彼らは「ホサンナ」と叫びました。皆さん、「ホサンナ」とはどういう意味でしょう？ それは、ヘブライ語では「助けてください」あるいは「救ってください。わたしは祈っています」という意味です。しかし、キリスト教的な意味では、人々は「ホサンナ」という単語を、イエス・キリストをメシアとして賛美し礼拝することばとして歌ったり叫んだりするときに用いています。

この四旬節のこれまでの5週間の準備の中で、教会と福音のメッセージは毎年繰り返して同じことを述べているのではないのでしょうか。「悔い改めなさい」「回心しなさい」「互いに愛し合いなさい」「ゆるし合いなさい」などなど。しかし、わたしたちは四旬節の後にもまた同じ生活をするのではないのでしょうか。告解しても、繰り返してまた同じ罪を犯すのではないのでしょうか。教会に来ることは、現世について文句や悪口を言ったりするためですか？ 教会の教えはなんと不安定なのではないのでしょうか。共同体として、それは多くの異なった人々がいて、生活や態度も異なっています。習慣や文化の違いもあると思いますが、キリスト教徒として、これらの違いを受け入れたいと望んでいる人々がいます。当然、嫌われることもあります。皆さんは他の人々に苦しい思いをさせることを好みますか？ 言葉としてあるいは一般的な表現かもしれませんが、「ゆるされないことをされたら、絶対にゆるしません」、この言葉を聞いてわたしは驚きました。そんなことを勉強会で教えられたのですか？

一方、お聞きになった福音朗読について言えば、イエス・キリストは同じ様に、ユダヤ人たちが受け入れず、嫌われて裁かれました。そして、十字架に架かるために、自分の十字架を運ばれました。それは、人間を罪の奴隷状態から開放するためであり、また自由に自分のいのちを捧げるためでした。イエスは父である神様に何と言われましたか？ イエスは苦しんでいても、死ぬとしても、怒りや憎しみや復讐のことを考えられませんでした。そして、「父よ、彼らをゆるしてください。自分が何をしているのか知らないのです」と言われました。本当の信徒であり、感じる心を持っているなら、悟りは遠くありません。

さて、福音でイエスの受難を読みました。このような悲しい出来事を読んでいると、わたしたちの心もだんだんと沈んで、痛み、刺されている気持ちになるのではないのでしょうか。ご存知のとおり、毎年同じことが繰り返されますが、皆さんは心が痛みませんか？ 教会で教えられていることはいつも同じではないのでしょうか。他の司祭が教えるとしても、重要な点はただ一つだけです。教え方、あるいは、告げられる方法は異なっていますが、宣べられていることは、「神様がわたしたちを愛しておられる」、そういうことです。愛のために、神様はご自分の御独り子を遣わされた。御子は神の聖心を行うために、また、わたしたちの救いのために、この世に来られました。罪人であるわたしたちがこれらのことを理解出来ないなら、一体どうしたら良いのか分からないでしょう。

これからの聖週間、次のようなことを考えてみましょう。すなわち、わたしにとってこの四旬節に、特にイエスの受難から復活祭まで、自分の生活と心を十分に準備したのでしょうか。あるいは、まだ不十分だったのでしょうか。また、今回の聖週間に復活されたイエスと出会うために、何をすれば良いのでしょうか。そして、どのように神様の希みに適うことができるのでしょうか。これらのことを考えながら、しばらく座ったまま、沈黙のうちに時間を過ごしましょう。